

第二部 教育実習の実際

第Ⅰ章 授業実践力向上のための教育実習の在り方

自己の課題を把握し，改善を図る教育実習の在り方	27
1 改善すべき課題を見付けよう	27
2 授業が「みえる」ようになろう	28
3 授業が「できる」ようになろう	30
4 授業の分析を基に，授業実践力を評価しよう	32

自己の課題を把握し、改善を図る教育実習の在り方

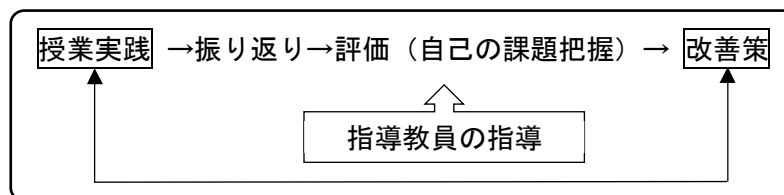
(1) 授業実践力向上のための教育実習

	教育実習期間	
	1週目	2週目～4週目
実習内容	授業参観	授業実践（5～7時間）
課題	授業を参観する視点	子供が意欲的に学習に向かう教材や学習課題の提示 子供が主体的に学習に向かう授業の構想
実習内容	参観した授業の学びから授業を構想すること ※指導案作成	授業実践 → 振り返り → 評価（自己の課題把握） → 改善策 ↑ 指導教員の指導 ※5～7時間の実践で繰り返す。

上の図は、令和6年度教育実習の3年次教育実習生の実習内容と授業実践力向上のための取組を示したものである。

この実習生は、1週目の授業参観において、授業を参観する視点について課題を持ち、子供の様子から授業を分析するということを指導教員の指導から学んだ。学んだことを基に2週目からの授業実践において自己の課題を「教材や学習課題の提示」「主体的に学習に向かう授業の構想」と定めた。そして、指導教員の指導の下、授業を改善していった。これは、実習生の授業実践力が向上していった過程の姿である。

教育実習は、授業実践力を向上させるために、右の図のようなサイクルを実践する場である。このサイクルを通して、授業力を向上させるために必要なポイントは次の四つである。



【ここがポイント】



- ① 授業参観から学んだことを基に課題を見付けよう！
- ② 授業が「みえる」ようになろう！
- ③ 授業が「できる」ようになろう！
- ④ 自分の授業を分析し、評価・改善しよう！

1 改善すべき課題を見つけよう

「授業実践力に関してあなたの課題は何ですか？」と問われて即答できる人は少ない。自分の授業は自分が一番見えないからである。しかし、授業実践力を向上させるためには、自分の課題を的確に把握することが非常に重要である。

適切な課題とは次の要件を備えた課題である。

- 授業実践力を向上させるために価値のある課題
- 自分の力量にあった課題
- 自分が本気で改善したいと思う課題

このような課題を設定するためには、次のようなプロセスが必要である。

① 自分の課題を考察する

視点を決めて自分の課題を考察してみる

「子供とのかかわりに関する課題」
 「授業実践にかかわる課題」 など

書く（記録する）ことによって、1年次入門教育実習・2年次観察・参加教育実習などを振り返り、自分自身を見つめる。そして自分の課題を明らかにする。

② 課題を決定する

授業実践の経験が少ない場合、自分の課題を的確に判断することは難しい。そこで、指導教員と相談し、教育実習の課題を決定する。

③ 課題を修正する

授業実践を行っていく過程で、最初に設定した課題が適切でないと気付く場合がある。その際には、授業実践の記録を基に指導教員と相談して、より自分にあった課題に修正する。

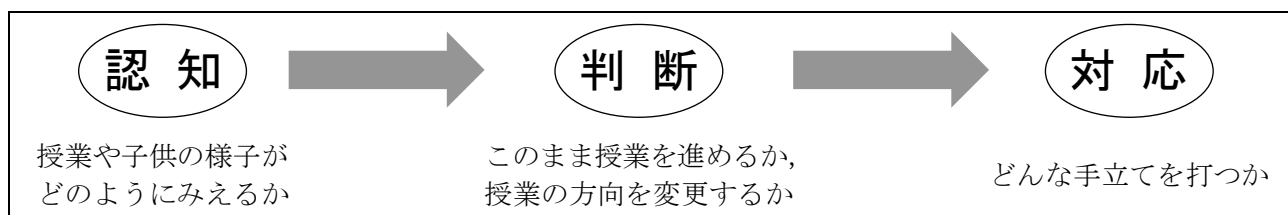
ここがポイント！

課題決定は、授業実践力向上の第一歩！ 自分にとって価値のある課題を見つけよう！

2 授業が「みえる」ようになろう

（1）授業が「みえる」とはどういうことか？

授業を実施している最中、教師は常に意思決定を求められている。「このまま授業を進めてよいのか」「指示を追加しないと子供は活動できないのか」。このような意思決定は、授業の成否を左右する重要な判断である。しかし、子供が発しているサインを察知して、即座に対策を講ずることは容易ではない。的確な判断を下すためには、授業が「みえる」ことが重要なのである。



言い換えれば授業の質を高めるためには、教師は「発問」や「板書」というような指導技術を身に付けるとともに、授業が「みえる」ようになるための力を身に付けなければならない。

（2）授業が「みえる」ようにするためにはどうすればよいのか？

授業が「みえる」ようにするためには、まず授業を見なければならない。教育実習期間は、指導教員や他の実習生の授業を観察する機会が設定されている。そのときこそ、授業が「みえる」ようになるチャンスである。その際、次のことに注意が必要である。

- ① 視点を決めて授業を見よう
- ② 当事者になって授業を見よう
- ③ 子供の事実を記録しながら授業を見よう
- ④ 事実を基に話し合おう

① 視点を決めて授業を見よう

授業を観察していると、様々な事象に気付く。しかし、授業の中で起こっていることをすべて見ようとすると、結局、何も見えずに終わってしまうことがある。そのためには、**観察の視点**を決め、その視点を中心に観察することが大切である。

その観察の視点が、自分が改善したいと思っている「課題」と結びついていると、観察したものを自分の授業実践力向上に直接生かすことができる。

観察の視点

- 教師の発問と促される子供の姿
- 教師の指示と促される子供の姿

- 教師の板書と促される子供の姿
- 教師の机間指導の仕方
- 教師の教室内での立ち位置 等

② 当事者になって授業を見よう

他の人の授業を見ていると、傍観者になってしまう場合がある。しかし、それでは授業が「みえる」ようにはならない。「自分ならどうするか？」と常に当事者意識をもって授業を観察しなければならない。また、授業を観察しながら気付いたことはその都度、指導案やノートに記録する。

「なぜ、ここで教材を提示するのか？自分なら…」と常に当事者意識をもって授業を観察し、その気付きを記録することが授業について協議する際に重要な根拠となる。

③ 子供の事実を記録しながら授業を見よう

授業では多くの子供が活躍する。誰が、どのような発言をし、それに対して学級全体がどのような反応をしたか、観察者としては教室で起こった事実をすべてのことを見たい、記録したいと考える。しかし、現実にはそれは不可能である。不可能なことをして、結局何も見えずに終わるより、「子供の事実をしっかりと見て詳細に記録する」ことの方が現実的である。

つぶやきや表情、ノートの記述、他の友達とのかかわり等も、記録することが望ましい。

〈授業観察ノート〉

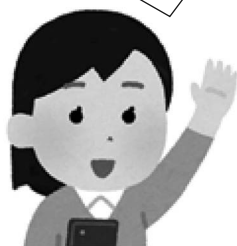
6-2 国語	
教師の働きかけ	子どもの反応
9:12 教科書見せ。	M すごいね。 N かえりたね。 Y 書きた。 Ys 指押して書いて書きた。
9:15 フリット画付け 9:17 画記された人は名前～	
9:18 この文章、これはある詩です。 これは外国の詩で、 カレルマンの詩です。文句で いる人。 変な話と思ひますか？	Ys 詩みたいじゃないね、文章の。 S 黄色い四角。 H 前半は「うーんうーん」という感じなんだけど、 そこから後は死ねか始まっている。 Ys 前半はつながっているけど、後半はつながっていない。 前半と後半がつながっていない。 京都国語の初講みたい。 Ks 文章みたい。 Ys 書いてないところがある。 N 詩みたいじゃない、漢字も書かれてなくて文章の。 Ks 題名がない。 Ks 題名もない詩もある。って言うか、普通はない。
9:25 この詩に題名をつけると したら、どんな題名をつけ ますか、黄色い四角には 同じ言葉が入ります。 フリットに入る言葉と その理由を書きましよう	青森？

④ 事実を基に話し合おう

授業を見ただけでは「みえる」ようにはならない。「みえたような気になっている」だけである。そこで、事実を基に、話し合う過程が重要となる。放課後の指導の時間には、自分が記録した事実を基に、指導教員や他の実習生と話し合う。その話し合いの中で、自分には何がみえていて、何がみえていなかったのかが明確になる。

先生はなぜ、この場面でBさんを指名したのですか？
私ならCさんを指名したと思うのです。

Bさんの考えを先に取り上げることによって、みんなにもう一度自分の考えを見直させたかったんだ。あなたはどのようにしてCさんを指名しようと思ったの？



● 話し合いを基に考察する

指導教員や他の実習生との話し合いを通して、授業の「みえ方」が他の人と異なることに気付く。その気付きを基に、授業の「みえ方」について考察し、実習日誌に記録する。その際、「事実」と「考察」に分けて記述する。

授業の みえ方	3限の授業の××の場面で、先生はBさんを指名した。ぼくならCさんを指名すると思う。Cさんのノートを見たら、正しいことが書かれていたので、これを発表してもらえば学級全体に広げられると思ったからだ。でも、先生の話の聞いたら、先生は、Cさんが正しい考えをしていることが分かっている、あえてみんなと違う考えのBさんを指名したとおっしゃった。そうすることで、学級全体に自分の考えを見直させたいと考えたそうだ。(事実) ぼくは、Cさんを取り上げることによって授業のねらいに近付けるということしか考えていなかった。でも、先生のような指名の仕方をする、確かに、すぐに正解を出すより、みんなの理解が深まる。正解が一人いたとしてもそれに飛びついてはだめで、学級の子供たち一人一人の考えを見取って、それを基に授業を展開しなければならない。自分が授業をするときには、多くの子供の考えを見取りつつ指名の順を考えながら授業をしたいと思う。(考察)
------------	---

ここがポイント！

- 授業を見る目を鍛えよう。
- 授業を見ることで自分自身を見つめよう

3 授業が「できる」ようになろう

授業実践力は短期間で身につくものではない。授業の実践→振り返り→授業の実践…を繰り返すことによって、身に付けることができるのである。

(1) 模擬授業

模擬授業は、実習生が「教師役」と「子供役」に分かれて、実際の授業の場面を想定し、教材の提示、発問、応答、指名、演示、板書を行う。模擬授業のやり方は大きく分けて二つある。

○ 授業の山場の場面を取り上げて練習する。

授業の山場の場面の指導案をごく簡単に作成し、それを基に、15分～20分程度で授業の練習を行う。

○ 1時間の授業の流れに沿って練習する。

1時間の授業の指導案を作成し、その流れに沿って1時間分授業の練習を行う。

どちらの場合も、模擬授業終了後、参加者全員で授業の振り返りを行う。模擬授業と振り返りを繰り返すことによって、実習生各自の指導技術の特徴と弱点が明らかになり、授業実践力向上につながっていく。模擬授業を行うときのポイントは以下の二つである。

ここがポイント！

○ 「子供役」は学級の子供になりきる

「子供役」が大学生の意識で参加したのでは、模擬授業の意味がない。その学級にいる一人の子供を想定し、その子供になりきって模擬授業に参加する。

○ 授業者が納得できる振り返りを行う。

振り返りの場面では、授業者を責めるのではなく、「よい点」と「改善すべき点」を全員が責任をもって話し合う。

(2) 研究授業

研究授業は、実習生の授業実践力を評価するために重要な授業である。研究授業は、多くの他者が参観し、授業について協議をする。また、授業を克明に記録する。教育実習で行う研究授業は次の二つに分けられる。

- 中研…全実習生のうち数名が代表として細案授業を公開する。
- 小研…全実習生が細案授業を公開する。

〈授業記録〉

① 授業の記録

- 全体記録
授業者以外の実習生が授業の様子を次の方法で記録する。
 - ・授業の流れ…「教師の働きかけ」「子供の反応」を手書きで記録する。
 - ・板書……………授業の最後に、板書を撮影する。
- 個別記録
実習生は、観察する子供を決めて、その子供の事実を記録する。
 - ・「教師の働き掛け」に対する「子供の反応」
 - ・発言、記述、つぶやき、表情、視線、他の子供とのかかわり

② 協議会のもち方

協議会では、子供の事実を基に、教師の働き掛けの有効性を検証する。

[illegible]

ここがポイント！

記録を基にした他者との協議によって、自らの課題の改善状況を把握したり、新たな課題を設定したりすることができる。

○ 子供の事実を基に協議する

全体記録と個別記録を活用し、子供の事実を基に教師の働き掛けの有効性について話し合う。

私が見ていたDさんは、先生が課題を提示した瞬間、「変だ」とつぶやき、ノートにこんな図を描いて考え始めました。この課題はDさんの思考を促したと思います。

Eさんは課題を提示したとき、「ん？」と言ったまま何も書けませんでした。課題の内容がよく分からなかったようです。



○ 授業者の課題に沿って協議する

参加者は評論家になってはいけない。授業者の課題を受けて、その改善につながるように共に考える姿勢で協議を行う。

(3) 日常の授業

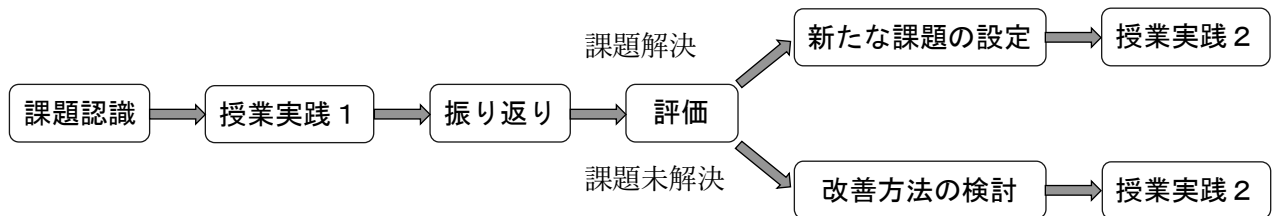
教育実習で最も大切なのは日常の授業である。日常の授業の実践と振り返りにより、実習生の課題が明らかになったり、課題の改善が図られたりするからである。

しかし、模擬授業や研究授業のように、多くの他者から見てもらうことが難しいため、ビデオ等で記録を残し、授業後に振り返りを行うことが必要となる。

4 授業の分析を基に、授業実践力を評価しよう

(1) 授業実践力を評価することの意義

授業実践力を向上させるための営みは、以下のようなサイクルの繰り返しである。授業を実践し、振り返り、それを基に評価を行う。その評価の結果、始めに設定した課題が解決していると認められれば、次の課題を設定する。それとは逆に、解決が十分ではないと評価された場合には、課題解決のための方法を再検討し、授業実践を行う。



(2) 評価の方法

① 授業日誌・授業観察日誌を蓄積する

自分自身が行った授業や観察した授業について視点を決めて日誌に記録し、それを蓄積する。それをまとめることによって自分の授業の「みえ方」を考察したり、授業実践力を評価したりすることができる。

② 授業の発話記録を（授業記録）を分析する

授業中の教師・子供すべての発話を記録する。そこに記録された言葉を手掛かりに、授業の流れを記録し、どのようなやりとりが行われていたかを分析する。発話記録を分析することによって、「特定の子供だけが発言している」「子供のつぶやきに気付かなかった」など授業の傾向が見えてくる。

③ 対話によって振り返る

①から②の方法はいずれも授業者一人でできる評価方法である。しかし、「他者」と対話することによって、授業実践力をより正確に評価したり、次の授業に向けた課題を設定したりすることができる。①から②の方法で記録したものを基に、指導教員や他の実習生と対話することが有効である。

ここがポイント！

- 記録には、授業者には「みえない」子供の事実が記録される。分析して、自分の授業実践力を評価しよう。

授業をしているときには気付かなかったけれど、Fさんが「分からない」とつぶやいている。私の説明では伝わらないんだ。次にはもっと子供の表情を見取りながら説明しよう。



第Ⅱ章 教育実習の記録と振り返り

- | | | |
|---|-------------------------------|----|
| 1 | 教育実習の記録 ～教育実習日誌の活用について～ | 35 |
| 2 | 教育実習をどう振り返るか | 40 |
| | ～教育実習での学びを大学での学びにどう生かすか～ | |

1 教育実習の記録 ～教育実習日誌の活用について～

(1)「教育実習日誌」をなぜ書くか

教育実習日誌を書く意義は、次の三点と考える。

- ① 自己の課題や目標に立ち返り、自分の取り組みを自己評価する。
- ② 指導教員との指導の往復により、指導力の向上を図る。
- ③ 自己の教育実習の成果と課題を明らかにし、今後の大学での学びに生かす。

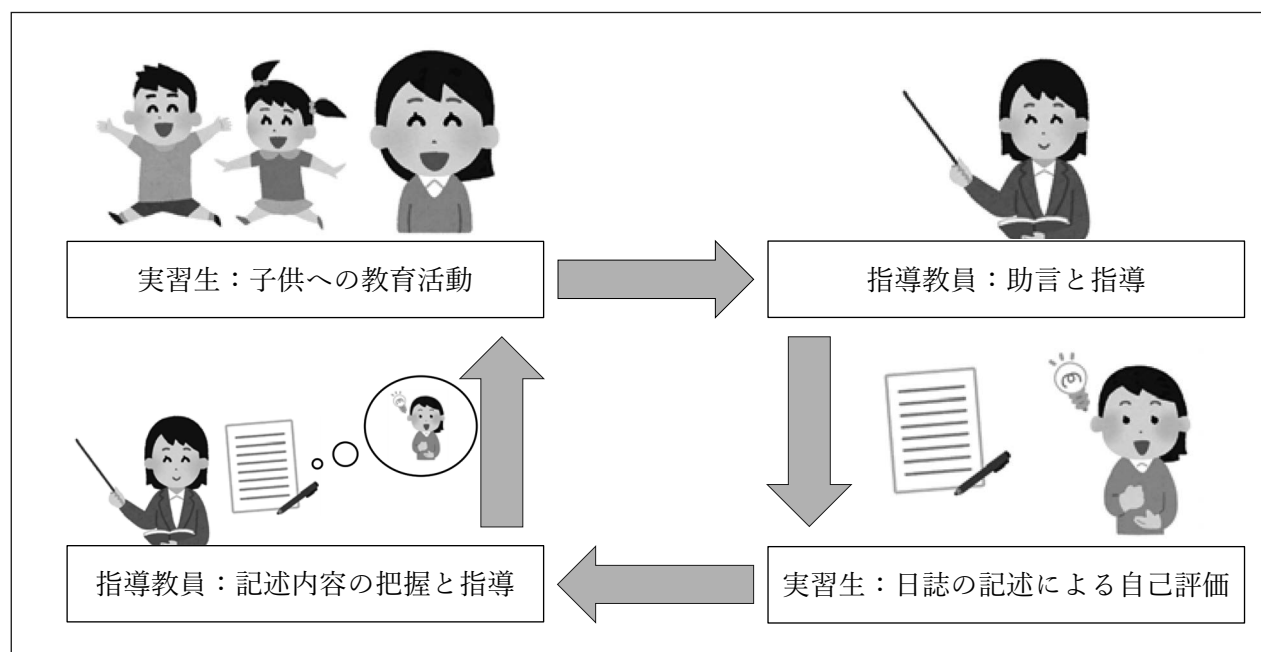
① 自己の課題や目標に立ち返り、自分の取り組みを自己評価する。

教育実習生は、教育実習が始まると担当する授業の構想や準備に多くの時間をかけることとなる。そのため、教育実習が始まって数日もたつと、教育実習中に立てた自己の課題や目標を見失いがちになる傾向が見られる。

一日の教育実習を終えて教育実習日誌を書くことで、自己の教育実習の課題や目標に毎日立ち返ることができ、自分の一日の取り組みを自己評価し、改善案を考え課題解決や目標に迫っていくことができる。

② 指導教員との指導の往復により、指導力の向上を図る。

教育実習日誌は、次のようなサイクルを経ることで、自らの指導力の向上につながる。



教育実習日誌を記入する前後において、教育実習生は指導教員から指導を受けることができる。そのため、効果的に自己の教育実習の目標に迫ったり、課題の解決に向かったりして、教育観を深めることができる。また、指導教員も教育実習生の日々深まる考えを教育実習日誌により把握することができるため、教育実習生が感じている課題や悩みについて効果的な指導を行うことができる。

このサイクルにより、教育実習生は、教育実習日誌を書くことで、指導教員に指導を受けながら、指導力を日々高めることができる。

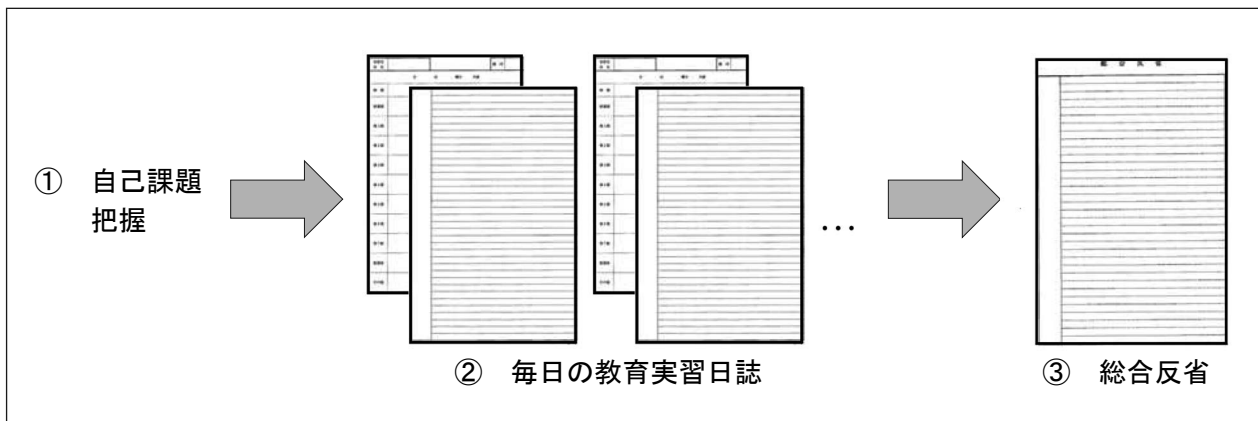
③ 自己の教育実習の成果と課題を明らかにし、今後の大学での学びに生かす。

教育実習を終えると、自己の教育実習の成果と課題を明らかにするために、総合反省を書くこととなる。ここで明らかにした成果と課題は、今後の大学での授業や研究、また次回の教育実習や実際の教育現場で生かすことができる。

(2)「教育実習日誌」をどう書くか

教育実習日誌は、単なる実習活動の記録ではない。今後に生かす自らの成果や課題を生むものとなる必要がある。

そのためにも、以下のような一連の流れにおいて、自己の教育実習の課題や目標に正対した教育実習日誌を作成する。



① 自己の課題把握

限られた期間の教育実習を有意義なものにするためにも、各自が自分の課題を明らかにし、課題や目標をもって配属校での教育活動に取り組むことが大切になる。

その際、次に示す「教育実習での“学びの4観点”」を参考にとよい。

〈教育実習での“学びの4観点”〉

- ア 「社会人（公務員）」として求められること
- イ 「教師」として求められること
- ウ 「子供とのかかわり」において求められること
- エ 「授業実践力」を高める上で求められること

ア 「社会人（公務員）」として求められること

- ・決めた時刻に起きることができる
- ・自分から進んで明るいあいさつができる
- ・人に話しかけられたとき、丁寧な言葉で受け答えができる など

イ 「教師」として求められること

- ・授業や清掃の開始時刻には遅れない
- ・授業と休み時間のけじめを付けている
- ・通勤の際、学校や子供の話をしない など

ウ 「子供とのかかわり」において求められること

- ・子供の話を、子供の目を見て真剣に聞いている
- ・学級の子供全員に分け隔てなく声をかけ、話をしている
- ・間違ったことは、毅然とした態度で指導することができる など

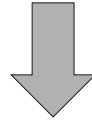
エ 「授業実践力」を高める上で求められること

- ・どの子供にも分かりやすい、簡潔な指示、発問になっている
- ・多様な考えが生まれる教材である
- ・挙手をした子供ばかりを指名しない など

【アとイの観点についての課題把握】

○ “学びの4観点” のアとイに該当する具体例を、箇条書きで書き出す

- ・これまでの大学での講義，1年次入門教育実習，2年次観察・参加教育実習，3年次教育実習など，各自のこれまでの経験を基にする。
- ・どの観点に入るか区別が難しいものは，自分が該当すると思うところ，または両方に記載しておく。



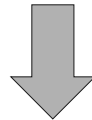
〈アとイの観点の課題〉

- ◇ 4段階の自己評価を行い，自分がまだうまくできていないと自覚しているもの
- ◇ 各自が記載した具体的に書き出せなかったもの（教育実習を行う中で新たに気付いていくもの）

【ウとエの観点についての課題把握】

○ “学びの4観点” のウとエについて，自分が課題と認識している具体的な内容を書き出す

- ・これまでの大学での講義，1年次入門教育実習，2年次観察・参加教育実習，3年次教育実習など，各自のこれまでの経験を基にする。
- ・具体的な経験があれば，それも合わせて記述するとよい。



〈ウとエの観点の課題〉

- ◇ 各自が挙げた課題の中から，指導教員と相談の上，教育実習での課題や目標を決定する。
- ・教育実習初日の放課後の指導・打合わせの時間に行うとよい。

② 毎日の教育実習日誌

〈表面〉

- ・手書きで作成する場合、鉛筆ではなく、ペンで書く。修正する場合は、二重線と訂正印で修正する（修正液等を使用しない）。
- ・配属学級の時間割ではなく、教育実習生が実際に行った内容を記載する。
- ・「講義」（配属校の教諭から講義を受ける）、「参観」（自分以外の授業者の授業を参観する）、「授業」（自分が授業を行う）を示し、その内容を記載する。
- ・放課後の欄には、担当教員との打合せのおまかな内容を記載しておく。

実習生 氏 名		校 印	
月 日 曜日 天候			
時 限	観 察・参 加・実習事項・勤務内容		
始業前			
第1限	講義「授業参観の心構え」 研究主任 ○○教諭		
第2限	参観「国語 スイミー」（○○教諭） （↑配属校の教諭の授業を参観する場合）		
第3限			
第4限	参観「算数 かけ算」（○○教生） （↑教育実習生の授業を参観する場合）		
第5限			
第6限	授業「体育 水遊び」 （↑自分が授業を行う場合）		
第7限			
放課後	打合せ（授業の反省、明日の授業の検討）		

〈表面〉

〈裏面〉

- ・自己の教育実習の課題や目標につながるように、その日の教育実習の自分の行動を自己評価する。
- ・新たな学びがあった際は、「教育実習での“学びの4観点”」に関連させて記載しておく。

〈教育実習での“学びの4観点”〉

- ア 「社会人（公務員）」として求められること
- イ 「教師」として求められること
- ウ 「子供とのかかわり」において求められること
- エ 「授業実践力」を高める上で求められること

観察した ことを通 して	
子供と のかかわり	
その他	

〈裏面〉

- ・記述においては「事実に対する“感想”」ではなく、「事実に基づく“解釈”や“価値付け”」を行って書く。
 - （例1）Aさんは、教師の△△△する働き掛けにより「□□□」と「発言／つぶやき／記述」しました。[←事実] これは、教師の働き掛けにより、Bさんが～～～と考えるようになったからです。[←解釈]
 - （例2）Cさんという子供の□□□したことに對して、先生は△△△と指導しました [←事実] これは、○○○さんが～～～と考えていたことに對しての指導であり、とても必要な指導だと学びました。[←価値付け]
- ・一日の実習内容を時系列に並べて述べたり、根拠のない感想で終えたりすることがないよう、読み返しながら記述するよう心掛ける。また、指導教員の指導を十分に踏まえて書くよう心掛ける。

③ 総合反省

総合反省は、教育実習を総括することで明らかになった成果と課題を、今後の大学での学びや次回の教育実習、実際の教育現場につなげるためのものである。

・次のように項目立てて書くとよい。

総合反省	

1 自己の教育実習の課題や目標

- ・「自己の教育実習の課題や目標」、及び「その課題や目標を設定した理由」を記述する。過去の教育実習での経験を基に、具体的に述べる。
- ・具体的な成果と課題については、「2」以降で述べる。

2 「社会人（公務員）、教師」として求められること

- ・「教育実習での“学びの4観点”」のア、イに関する内容について、経験に基づく学びを記述する。

3 「子供とのかかわり」において求められること

- ・「教育実習での“学びの4観点”」のウ「子供とのかかわり」に関する内容について、自分の課題や目標にどの程度まで迫れたのかを述べる。そして、どのようなことが課題として残ったのかを明らかにする。
- ・記述においては、自分が経験した事実を基に、価値付けや解釈をしながら自分の学びや考えを述べる。

4 「授業実践力」を高める上で求められること

- ・「教育実習での“学びの4観点”」のエ「授業実践力」に関する内容について、自分の課題や目標にどの程度まで迫れたのかを述べる。そして、どのようなことが課題として残ったのかを明らかにする。
- ・記述においては、自分が経験した事実を基に、価値付けや解釈をしながら自分の学びや考えを述べる。

5 今後の課題と方策

- ・この項目は、今後の大学での学びにつながる重要な内容である。今回の教育実習で積み残された課題を明らかにし、今後大学に戻ってそれらをどのように学んでいくかを述べる。決して薄い内容にしてはならない。

＜手順＞

- ①上記の2～4を参考にし、今回の教育実習で積み残した課題を、明確かつ具体的に述べる。
- ②今後、その課題解決に迫るために、大学での学びにおいてどのようなことをしていけるか、具体的に述べる。

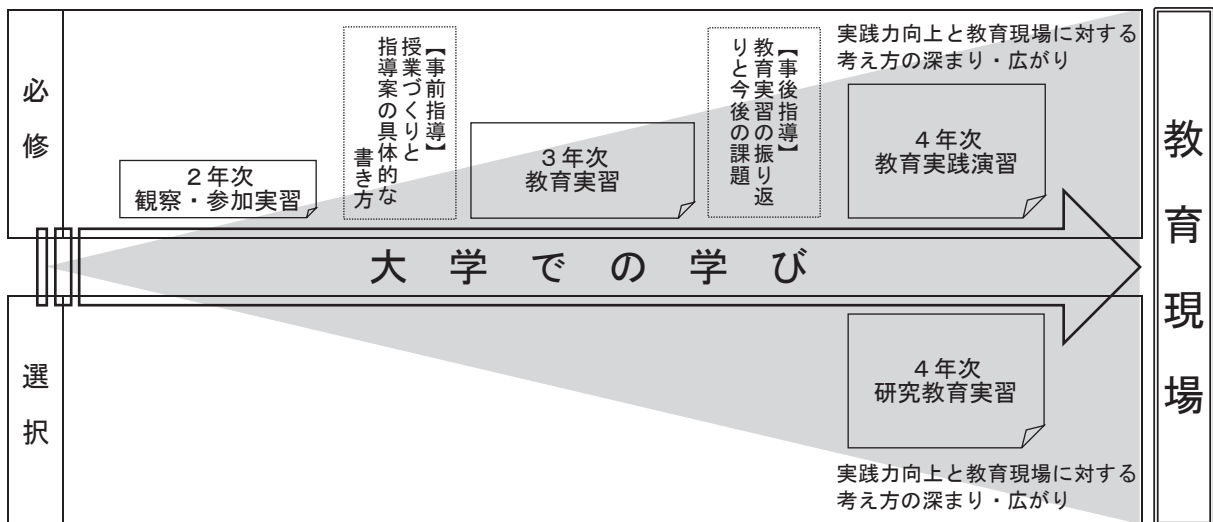
＜留意点＞

- ・総合反省は、4枚（8ページ）以上作成する（教育学部2年時の「観察・参加実習」のみ2枚（4ページ）以上）。
- ・パソコンで作成する場合は、文字サイズは10.5pt、フォントはMS明朝とする。手書きの場合は、読みやすいように、字の大きさ、間隔、字体等に気を付けて、丁寧に書く。
- ・プライバシー保護から、子供の名前は実名ではなく、仮名（Aさんなど）を使う。ただし、実習校から指示がある場合は、その指示に従う。
- ・教育実習日誌は、教育実習後の提出になるため、あらかじめ指導教員に提出の期日と時間を打ち合わせておく。提出物の確認など、提出の際は多少の時間を要するため、指導教員が子供へ指導している時間には訪問しない。
- ・訂正、押印忘れの対応のため、印鑑を持参する。
- ・全学教職センターHPにも別途作成例を掲載しているので、そちらも参照すること。

2 教育実習をどう振り返るか ～教育実習での学びを大学での学びにどう生かすか～

教育実習を通して得た成果や課題を、今後の大学での学びに生かしていかなければならない。つまり、教育実習で教育現場を垣間見たことで、今後の大学の授業・研究においても、問題意識をもって学ぶことが求められるのである。

学び続けることで、教育に関する考えは深まり、広がっていく。近い将来、教育現場に出て、教師としての役割を果たすためには、継続的に学びを重ねていく必要がある。



ここでも、「教育実習での“学びの4観点”」に照らし合わせて考えていきたい。

〈教育実習での“学びの4観点”〉

- ア 「社会人（公務員）」として求められること
- イ 「教師」として求められること
- ウ 「子供とのかかわり」において求められること
- エ 「授業実践力」を高める上で求められること

ア 「社会人（公務員）」として求められること

- ・生活に節度があり、規則正しく過ごしている
- ・法の遵守はもちろんのこと、適切なマナーを伴って行動できている
- ・場に応じて、適切な言葉遣い、身だしなみができている
- ・多様な人々とのかかわることに楽しさを感じることができる

など

イ 「教師」として求められること

- ・教育に関する情報を自ら進んで得ようとしている
- ・人と話し合い、考えを交流させることで、教育に対する考えを深めていくよさを感じることができる

など

ウ 「子供とのかかわり」において求められること

- ・教育書を読んだり子供とかかわる機会を作ったりして、児童理解を深めようとしている
- ・友人や大学の先生の話をつくりと聴き、多様な考えを受け止めながら聞くことができる

など

エ 「授業実践力」を高める上で求められること

- ・大学の講義では、教育現場での具体的な指導場面を思い浮かべながら話を聞き、その場で自分の考えを持つように心掛けている
- ・教育研究会に積極的に参加し、よい授業を多く観ようとしている

など

第Ⅲ章 学習指導及び学習指導案作成の基礎・基本

1	教育の実践研究の枠組みと学習指導案	43
2	学習指導案を作成する	44
3	授業を実践する ―授業展開における留意点―	51

1 教育の実践研究の枠組みと学習指導案

(1) 学習指導要領改訂のポイント

今回の改訂が重視するのは、我が国の学校教育が長年目指してきている「生きる力」の育成という目標を、教育課程の編成を通じて具体化し、そうした教育課程に基づく教育活動を通して、子供たち一人一人に、社会の変化に受け身で対応するのではなく、主体的に向き合って関わり合い、自らの可能性を発揮したような他者と共同しながら、よりよい社会と幸福な人生を切り拓き、未来の創り手となるために必要な力を育んでいくことである。

そのためには児童生徒が

「何ができるようになるか」(育成を目指す資質・能力)
「何を学ぶか」(教科等を学ぶ意義と、教科等間・学校段階間のつながりを踏まえた教育課程の編成)
「どのように学ぶか」(各教科等の指導計画の作成と実施、学習・指導の改善・充実)
「何が身に付いたか」(学習評価の充実)
「子供一人一人の発達をどのように支援するか」(子供の発達を踏まえた指導)
「実施するために何が必要か」(教育課程の実施に必要な方策)

といった観点にわたって、教育課程や教育活動の改善・充実を図っていくことが必要とされている。

(2) 育成を目指す資質・能力

育成を目指す資質・能力の具体例については、さまざまな提案がなされており、社会の変化とともにその数は増えていく傾向にあるが、こうした中、育成を目指す資質・能力に共通する要素を明らかにし、教育課程の中で計画的・体系的に育んでいくことができるようにする必要がある。

教科等と教育課程全体の関係や、教育課程に基づく教育と資質・能力の育成の間をつなぎ、求められる資質・能力を確実に育むことができるよう、教科等の目標を以下の3つの柱に基づき再整理することが必要である。

- ② 「何を理解しているか・何ができるか(生きて働く『知識・技能』の習得)」
- ② 「理解していること・できることをどう使うか」(未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成)
- ③ 「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養)

子供たちに必要な資質・能力を育んでいくためには、各教科等をなぜ学ぶのか、それを通じてどういった力が身に付くのかという、教科等を学ぶ本質的な意義を明確にすることが必要になる。各教科等の教育目標や内容について、資質・能力の在り方を踏まえた再編成を進めることが必要になる。

その上で、各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすのが「見方・考え方」であり、教科等の教育と社会をつなぐものである。子供たちが学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせられるようにすることこそ、教員の専門性に求められる。

また、教科等を超えたすべての学習の基盤として育まれ活用される資質・能力についても、資質・能力の3つの柱に沿って整理し、教科等の関係や、教科等の枠を超えて共通に重視すべき学習活動との関係を明確にし、教育課程全体を見渡して組織的に取り組み、確実に育んでいくことができるようにすることが重要である。全ての学習の基盤となる言語能力や情報活用能力、問題発見・解決能力などを、各学校段階を通じて体系的に育んでいくことが重要になる。

(3) 授業研究の枠組み

授業研究や授業改善とは、図1の例のように、予め設定した研究の基盤的枠組みを前提として、それに基づいて構想された学習指導案による実践展開を分析、吟味することにある。したがって、本来、学校教育における実践研究や提案授業を行う際には、前提となる研究の基盤的枠組みを設定した根拠や意図を明確にするとともに、枠組みそれ自体の明確な定式化が必要となる。

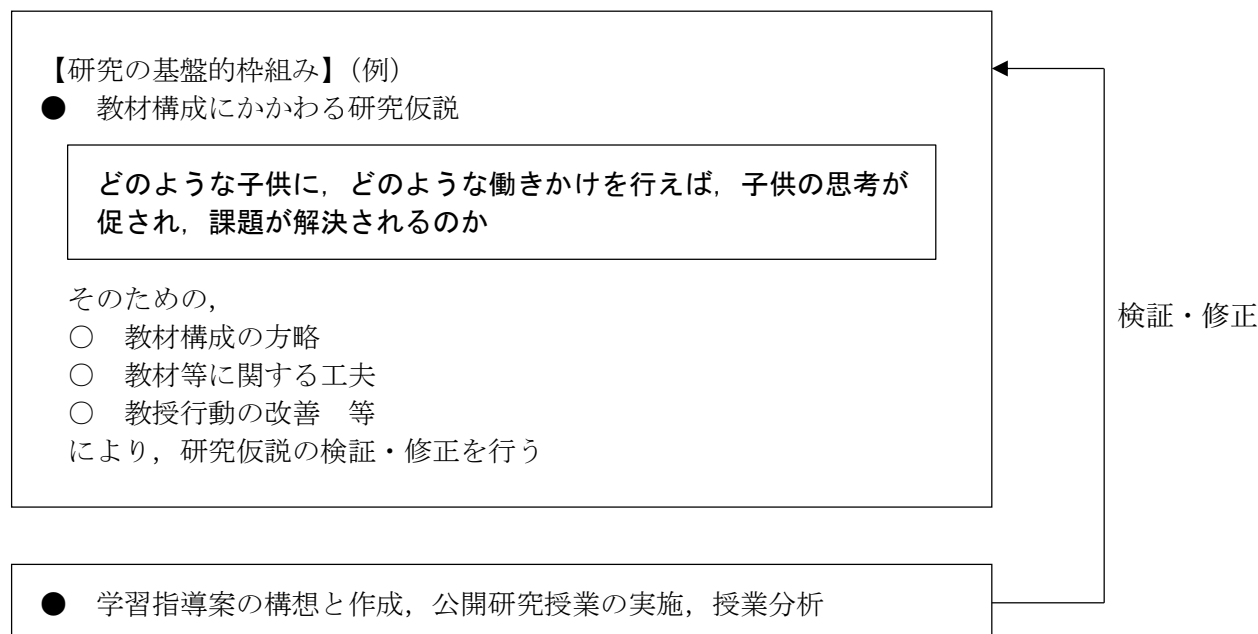


図1 実践研究の枠組みと学習指導案の関係

教育実習においても、単に経験や勘を頼りに授業を立案、実施するのではなく、可能な限り上記の枠組みを意識することが「実践の意味を説明する力量」の形成につながる。

本章では、図1の「学習指導案の構想と作成」部分を中心に、その手順、実際について紹介する。

2 学習指導案を作成する

学習指導案には、学校や、その教育及び研究の方針によって、様々な形式や形態があるが、基本的には、「指導の構想」(教材構成)の部分と「本時」(授業展開)の部分から成り立っている。ここでは、指導の構想部分に当たるものとして「授業構想カード」を、「本時」に当たるものとして「学習指導案(略案)」の作成方法を示すこととする。

(1) 「授業構想カード」作成の手順

図2の「授業構想カード」を作成することにより、筋道の通った授業構想が可能になる。特に構想する場合には、次の手順に従って行う。

- ① 本時のねらい→②まとめ→③本時の課題→④学習課題を生み出すための働き掛け→⑤課題を解決するための働き掛け

① 本時のねらい

学習指導要領で示されている「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」に対応したねらいを設定する。具体的には以下ようになる。

1 単位時間において

ア どのような内容について（何を学ぶか）

イ どのような学習活動を行うことで（どのように学ぶか）

ウ どのような資質・能力をつけるのかを（何ができるようになるか）

教師側が整理したもの。



「〇〇について ア, △△することを通じて イ, □□することができる ウ。」

【ねらい作成例】

身の回りにあるものの数の数え方についてア, 一つのまとまりのいくつ分といった考え方と九九表とをつなぎながら見つける活動を通してイ, 身の回りにあるものの数をかけ算九九表を使いながら数えることができるウ。

(小学校2年算数 掛け算)

② まとめ

授業の終末においてねらいを達成した姿を子供の言葉で記載する。

③ 本時の学習課題

設定したまとめが答えとなるような学習課題を設定する。基本的には「なぜ～だろうか」「～にはどうしたらよいか」といった疑問形で記載する。

④ 学習課題を生み出す働き掛け

学習課題は教師のみで設定されるものではなく、子供が「なぜだろう」「どうなっているのだろう」などと、疑問に思ったり解決したいと切望したりすることによって成立する。そのため、授業の導入において子供が解決したいと思うことができるような資料提示や問題場面等を設定する。

⑤ 学習課題を解決するための働き掛け

教材や指示・発問、学習形態等の工夫により学習課題を解決するために必要な働きかけを構想する。

授業構想カード		授業者 ()
☆単元・題材名「	」(	時間目/全 時間)
<本時のねらい>		①
<学習課題を生み出す働き掛け>		④
<本時の課題>		③
<課題を解決するための働き掛け>		⑤
<まとめ>		②
<振り返り>		

図2 授業構想シート

(2)「授業構想カード」の具体例

① 例1 小学校5年 算数「面積の求め方を考えよう」(全12時間)

授業構想カード

授業者 ()

☆単元・題材名「面積の求め方を考えよう」(5時間目/全12時間)

〈本時のねらい〉

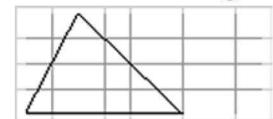
①

三角形の面積の求め方について、既習である平行四辺形の面積の求め方を基に図形の一部を移動したり分割したりすることを通して、平行四辺形の半分にすれば三角形の面積を求めることができることが分かる。

〈学習課題を生み出すための働きかけ〉

- 平行四辺形の面積の公式を確認する
- どのようにして公式を導き出したかを問い、図の一部を変形して求めることを確認する。

④



〈学習課題〉

③

三角形の面積を求めるには、どのようにすればよいか。

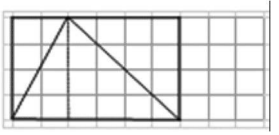
〈学習課題を解決するための働き掛け〉

⑤

- これまでの図形の面積の求め方を想起させ、「形を変えれば出せそう」という子の考えを賞賛し、「三角形の形を変えればこれまでの面積の求め方で出せそうか」と問う。
- ワークシートを作成し、それぞれ考えたことを作図させる。

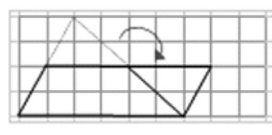
【子供の考え①】

長方形にして、面積を出しその半分にする。



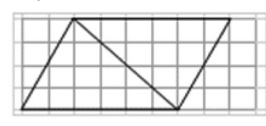
【子供の考え②】

三角形の上半分を側面に移動させて平行四辺形にする。



【子供の考え③】

三角形を二つに重ねて平行四辺形にし、面積を半分にする。



- 「個人→班→一斉」の順で活動させる。班では説明の後に、学習課題について班員の求め方の共通点をホワイトボードにまとめさせ、黒板に提示させる。
- 各班からの考えを共有し、学級としての共通点を問う。

〈まとめ〉

②

三角形の面積を求めるには、三角形を長方形や平行四辺形に変えて半分にすればよい。

〈振り返り〉

以下の3点で振り返らせる

「1. 今日の授業で分かったこと」「2. どのようにして分かるようになったか」「3. 授業を通して思ったこと・考えたこと」

② 例2 中学校3年 道徳「規則は優先されるか」(全1時間)

授業構想カード

授業者 ()

☆主題名 「規則は優先されるか」(C10 遵法精神, 公德心) (1時間目/全1時間)

〈本時のねらい〉

①

遵法精神, 公德心について, 元さんの思いやりと動物園の規則の尊重のどちらが大切かを考えさせることを通して, 規則にはすべての人々が安心して生活できるようにするための大きな意味が込められていることに気付く。

〈学習課題を生み出すための働き掛け〉

④

- 受験生が停車駅を勘違いして東北新幹線を止めたという新聞記事(日本経済新聞2005.2.3)を提示する。
- 新聞記事から, 5択(1. 例外を認めるべき 2. どちらかといえば認めるべき 3. どちらとも言えない 4. どちらかといえば規則は守るべき 5. 規則は守るべき)で自分の立場を決めさせる。
- 考えが分かれたところで, 学習課題を設定する。

〈学習課題〉

③

規則にはどのような思いが込められているのだろうか。

〈学習課題を解決するための手だて〉

⑤

- 資料「二通の手紙」を提示し, 内容を確認する。
- 主人公元さんがどのような気持ちで姉と弟を動物園に入れてあげようと思ったのかを問う。
- 自分が元さんだったらどうするかを問い, 「規則は守るべきだ」「例外を認めるべきだ」の立場ごとに数直線を黒板に提示し, ネームプレートなどで意思表示させる。
- 生徒同士の対話をおこなった後, それぞれの立場の共通点を問う。

〈まとめ〉

②

規則には, すべての人々が安心して生活できるようにするための大きな意味が込められている。

〈振り返り〉

- 次の3点で授業の感想を書かせる。
 - (1) 自分の考えが変わったことやきっかけ
 - (2) 新しくわかったこと, まだ悩んでいること
 - (3) これからの生活に生かしていきたいこと

(3)「本時」の書き方

① 学習活動と子供の意識・思考

「学習活動と子供の意識・思考」の欄は、児童生徒が行う活動や見出す内容・方法や見方・考え方、子供の反応を簡潔に記述する。その単元・題材の中核となる知識・技能などの獲得・形成、定着・習熟、応用・発展にかかわって、教師の働き掛け（教材、発問、指示 等）に触発されて行われる学習活動の様相を簡潔に記述する。この「学習活動と子供の意識・思考」の記述は、多くの場合、その語尾は「 ～ する」「 ～ できる」などとなる。ここには、期待する反応（標準的な正応答）のみでなく、それ以外の予想される反応（標準的でない正応答、意味のある誤応答、単純ミスによる誤応答、戸惑っている児童生徒の姿など）も記述し、それらの児童生徒への働き掛けを予め用意しておく。

② 教師の働き掛け

「教師の働き掛け」の欄には、教師が行う働き掛け（教材、発問、指示、課題及び準備する教具等）や指導上の留意点のいくつかを簡潔に記述する。発問、指示は枠で囲むなどして明示する（実際の授業ではできるだけその通りに言う）。その際、何のためにその働き掛けをするか（意図）を書くようにする。例えば、「 …… を検討させるために、次の発問を行う」「 …… への着目を促すために、○○のように働き掛ける」などとなる。また、机間指導の際にどのような児童生徒にどのような内容の助言をするか、どんなふうに板書するのか、さらに、考えを深めるために用意した補助発問、提示する資料や具体物などがあれば、この欄に記述する。

1 単元名													
2 本時のねらい													
3 本時の展開													
<table border="1"> <thead> <tr> <th>学習活動と子供の意識・思考</th> <th>教師の働きかけ</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>① ～を行い、～の存在に気付く。</td> <td>① ～の存在に気付かせるために、次のように働き掛ける。 〈発問1〉</td> </tr> <tr> <td colspan="2">学習課題</td> </tr> <tr> <td>②</td> <td>② ～のために、～する。 〈指示〉</td> </tr> <tr> <td colspan="2">まとめ</td> </tr> <tr> <td>③</td> <td>③ ～を促すために、次の発問をする。 〈発問2〉</td> </tr> </tbody> </table>	学習活動と子供の意識・思考	教師の働きかけ	① ～を行い、～の存在に気付く。	① ～の存在に気付かせるために、次のように働き掛ける。 〈発問1〉	学習課題		②	② ～のために、～する。 〈指示〉	まとめ		③	③ ～を促すために、次の発問をする。 〈発問2〉	
学習活動と子供の意識・思考	教師の働きかけ												
① ～を行い、～の存在に気付く。	① ～の存在に気付かせるために、次のように働き掛ける。 〈発問1〉												
学習課題													
②	② ～のために、～する。 〈指示〉												
まとめ													
③	③ ～を促すために、次の発問をする。 〈発問2〉												
4 評価													

図3 学習指導案「本時」のイメージ

(4)「本時」の具体例

① 例1 小学校5年 算数「面積の求め方を考えよう」(全12時間)

第5学年○組 算数科学習指導案(略案)

令和○年 ○月○日(○)○校時
授業者 教育実習生 ○○ ○○
指導者 教 諭 ○○ ○○

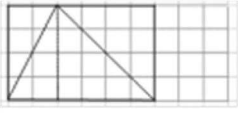
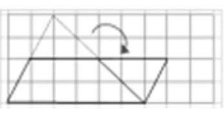
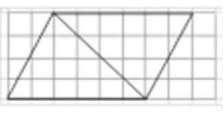
1 単元名(題材名)

「面積の求め方を考えよう」

2 本時のねらい

三角形の面積の求め方について、既習である平行四辺形の面積の求め方を基に図形の一部を移動したり分割したりすることを通して、平行四辺形の半分にすれば三角形の面積を求めることができる。

3 本時の展開

学習活動と児童の意識・思考	教師の働き掛け
①平行四辺形の面積の求め方について確認する。 ○平行四辺形の面積の出し方について説明する。 C:「底辺×高さ」です。 C:長方形にして出しました。 ○新たな図形の面積の出し方について予想する。 C:三角形だ。 C:形を変えればできるかな	①平行四辺形の面積をどのようにして求めるのかを想起させ、新たな図形として三角形を提示する。 ○平行四辺形を長方形に変形して面積を出したことを想起させる。 〈発問1〉この図形の面積はどのようにして出すことができるかな。
学習課題 三角形の面積を求めるには、どうすればよいか。	
②既習を基に三角形の面積の求め方を考える。 C:平行四辺形のときのように形を変えれば出せそう。 ○ワークシートに自分の考えを記入する。	②ワークシートを配り、三角形の面積の求め方を考えさせる。 ○「形を変えれば出せそう」という子の考えを賞賛し、「三角形の形を変えれば出せそうか」と投げかける。 ○一つの考え方をかいた子には他のやり方も考えさせる。 ○「個人→班→一斉」の順で活動させる。班では説明の後、学習課題について班員の求め方の共通点をホワイトボードにまとめ、黒板提示。 〈発問2〉それぞれの考え方の共通点は何だろうか。
C①長方形  C②平行四辺形  C③平行四辺形  ○班で説明し合い、班員の求め方の共通点をホワイトボードにまとめる。 C:どれも、長方形や平行四辺形にして面積を求められる。	〈発問2〉それぞれの考え方の共通点は何だろうか。
まとめ 三角形の面積を求めるには、三角形を長方形や平行四辺形に変えて、半分にすればよい。	
③今日の授業の振り返りを書く。 C:三角形も平行四辺形の時と同じように、形を変えれば面積を求めることができる。平行四辺形の半分で三角形の面積が出る。	③ノートに今日の授業の振り返りを書かせる。

4 評価

三角形の面積でも、既習を生かして、図を移動させたり分割したりしたことで面積を求めることができることを理解できたか。

② 例2 中学校3年 道徳「規則は優先されるか」(全1時間)

第3学年〇組 道徳科学習指導案(略案)

令和〇年 〇月〇日(〇) 〇校時

授業者 教育実習生 〇〇 〇〇

指導者 教諭 〇〇 〇〇

- 1 主題名 「規則は優先されるか」(C10 道徳精神、公德心)
資料名 「二通の手紙」(教育出版・道徳3年 平成31年)

2 本時のねらい

道徳精神、公德心について、元さんの思いやりと動物園の規則の尊重のどちらが大切かを考えさせることを通して、規則にはすべての人々が安心して生活できるようにするための大きな意味が込められていることに気付く。

3 本時の展開

学習活動と子供の意識・思考	教師の働き掛け
①新聞記事を提示により、本時の学習課題を設定する。 ○5項目のアンケートをとった後、話し合う。 C: 迷うが、規則は守るべきだ。 C: 停めた方がよいか、停めない方がよいか迷う。 C: 迷うが、少しは例外を認めてもよい。	①受験生が停車駅を勘違いして東北新幹線を止めたという新聞記事(日本経済新聞 2005.2.3)を提示する。 〈発問1〉新聞を読んで、あなたはと思いますか。
学習課題 規則にはどのような思いが込められているのだろうか。	
②資料を読み、規則の意味について考える。 ○元さんのとった行動について考える。 C: せっかく楽しみにしていたのに、ここで入れてあげなかったらかわいそう。 C: 規則があることは分かっているけれども、何とか二人の願いを叶えてあげたい C: 規則を守るとはわかっているけど。 ○自分だったらと立場を決めて対話する。 C: 規則を守ってお家の人と改めて来ように伝える。例外を認めることで、姉弟が危険な目にあってしまう可能性もある。他の園の人にも迷惑を掛けてしまうから。 C: 例外を認めて、元さんのように入れてしまう。姉弟とは親しいし、弟の誕生日を祝ってあげたいから。 ③対話の内容を基に双方の共通点を考える。 C: どちらも姉弟のことを考えているところ。	②資料を提示し、元さんの気持ちを想像させる。 〈発問2〉元さんは、どのような気持ちで姉と弟を動物園に入れてあげたと思いますか。 ○自分の立場についてネームプレートを貼らせ、考えの傾向を可視化する。 〈発問3〉「規則は守るべきだ」と「例外を認めるべきだ」の気持ちがあるみたいですね。自分が元さんだったら、どうしますか。その理由はどうしてですか。 ③両者の共通点を問い、まとめを考えさせる。
まとめ 規則には、すべての人々が安心して生活できるようにするための大きな意味が込められている。	
④学習を振り返り自分の考えを創る。	④次の3点で授業の感想を書かせる。 - 自分の考えが変わったことやきっかけ - 新しくわかったこと、まだ悩んでいること - これからの生活に生かしていきたいこと

4 評価

自分だったらどうするかを考え、学んだことをこれからの生活に生かしていこうと意欲を高めているかどうかを、発言やワークシートの記述から評価する。

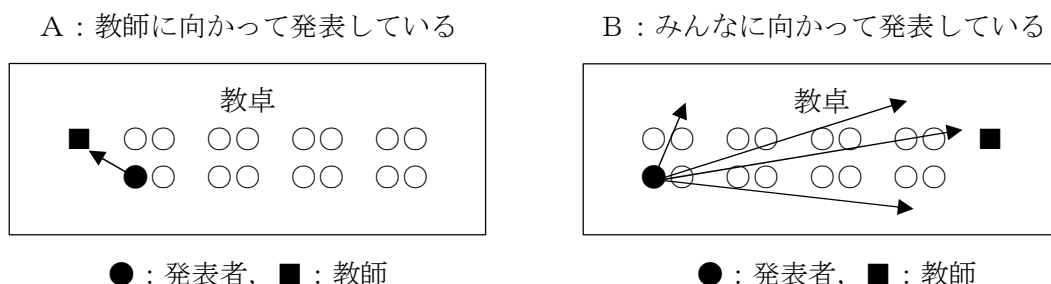
3 授業を実践する ―授業展開における留意点―

(1) 教授行動（課題提示、発問・指示等）にかかわって

- ・授業開始時刻に遅れない。また、授業終了時刻を極力守る。
- ・既習内容（対象1）とそれを発展させた状況（対象2）とを関連付けて提示する。
- ・ある程度の困難性を含む教材や多様な解決方法の可能な教材を意図的に取り上げる。
- ・本時の学習課題は、学習者との合意ができた時点で板書する。
- ・列指名（教室の同じ列の児童生徒に順に指名する）や複数指名（同じ結果を得た2人の児童生徒両方に発言させる）を意図的に取り入れる。
- ・教師にとって都合のよい標準的な正応答が発言されたとき、そのみで授業を進めることのないように、今の発言について他の人がどう考えるか、他の考えがないかを確認する。
例：「今の発言についてあなたはどのように考えますか。」
- ・「～ さんと同じです。」という返答の場合は、必ず「あなたの言葉で発言（表現）してください。」と指示し、自分なりの気づきや納得の仕方の表出を支援する。
例：「今の考えは、〇〇という点からの発言です。では、〇〇でない（例えば△△の）点から考えた人はいませんか。」 ※ 事前に読み取って意図的に指名するのが望ましい。
- ・互いの解決方法を検討する場を設ける。解決方法と結果のどこが同じなのか、どこが違うのかに注目させ、妥当性、有効性の検討を促す。
- ・どんな発言にもその児童生徒なりの妥当性があることを踏まえ、そのよさを認めるよう心がける。

(2) 教室環境（教師の位置、機器等）にかかわって

- ・具体的操作活動やタブレット端末等を活用しての活動を適切に取り入れる。
- ・発表している児童生徒との間にできるだけ多くの児童生徒が入るようにBのように移動する。



慣れてくると教師の位置にかかわらず、みんなに向かって発表ができるようになる。

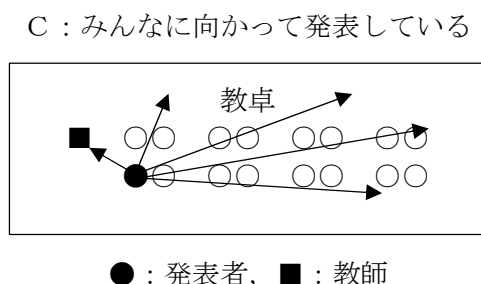


図4 教室における発表者と教師との位置関係について

- ・必要に応じて、学級で互いに合意された事柄を教室に提示し、常に参照できるようにする。
- ・視聴覚機器やタブレット端末等の利活用を工夫する。

（３）板書にかかわって

- ・文字を書く際は白または黄色チョークを使用する。赤，青等の色チョークは，大事な部分を囲んだり下線を引いたりなど，強調する際に用いる。

（参考：財団法人日本学校保健会「みんなが見やすい色環境」）

- ・どのような内容を，どのような流れで学習したのかが分かるように書く。また，途中でスペースが無くなった等の理由で，一単位時間の途中で消すことのないよう，板書計画をしっかりと立てて授業に臨む。
- ・主な発問は板書し，板書したとおりの言葉で問う（似たような言い回しでの言い換えをしない）。
- ・移動式の黒板，ホワイトボード，テレビ等のモニター画面も必要に応じて効果的に活用する。

（４）特別な支援を必要とする児童生徒への対応にかかわって

学習面や行動面において困難を示す子供に対して，その背景を理解し，授業においても適切な教育支援を行うことが大切である。

例えば，聞き取りの苦手な子供には，学級全体への指示の後，個別にもう一度指示を伝え，復唱させたり，行動を見たりして確認する。また，書くことの苦手な子供には大きなます目の用紙を用意したり，消しゴムで消したとき破れにくい紙を用意したりする。読むことの苦手な子供には教科書や配布物の漢字にふりがなをふるようにする。

教室でのルールや予定等は口頭だけでなく視覚的にもわかりやすく提示し，子供自身が見ていつでも確認できるようにする。一日の予定は朝の会などで子供に説明し，もし変更があれば，できるだけ早く知らせることにより見通しをもって活動できるようにする。

この後の章で，学校種毎に，さらに具体的な説明，紹介を行う。